

第五章

主な解読の主張

ここで紹介する調査は、イェール大学の Robert S. Brumbaugh による最も最近の解読の主張を除き、簡単なものである。Newbold, Feely,そして Strong の解読に関しては他の作家が良く扱い、それらは比較的容易に入手できる。問題に新たに参加した研究者や、方法論の理由から、完全を期すため彼らの主張の主な点について大まかな概略を記す。

5.1 Newbold

William R. Newbold 教授は Wilfrid Voynich が手稿を発見し、その解読、翻訳のためコピーを配った最初の学者である。Newbold は中世哲学・科学の研究者であり、1921 年に初めてその講演を行った。彼は手稿や、Roger Bacon のものとされる錬金術文献を彼の突然の死の直前まで研究した。彼の作業ノートは彼の友人であり、遺言執行人である Roland G. Kent 教授(Newbold and Kent 1928)によって編集され出版された。Newbold はスペインにいたユダヤ人が発展させたカバラとして知られる秘義に通じていた。彼は f116v にある混ざり合った文字の文章を研究し、すぐに"michi...daba.multas...portas"に達し(彼はこう読んだ) "Thou wast giving me many gates"と翻訳した。(その他のいくつかの f116v の読解については図 23 を見よ。) Newbold によれば、"gate"という単語には(ラテン語では"portae"もしくは"portas")ヘブライ語のアルファベットの文字を二つ同時に取り、そこから可能な組み合わせを選ぶカバラが使われている。最初から Voynich は、Roger Bacon が手稿の作者であると考えていた。Newbold は Bacon がこれらに通じている証拠として、彼の隠匿文に関する記述(セクション 4.4.2)同様、Bacon のギリシャ語の文法や、ヘブライ語に関する断片的な記述(Bacon 1902)を引用し、彼にはあるカバラの知識に通じているという証拠を作り上げた。

これを手がかりに、Newbold は Bacon のものとされる錬金術の作品を調べ、Bacon が使った普通のラテン語の中に秘密のメッセージを隠す方法を発見したと主張した。(この方法は私の第四章の概要では T.7)彼はヴォイニッチ手稿の中でもこの方法の変化したものが同様使われていると主張した。しかも Newbold は第一に錬金術論文からの「ラテン語の文章」暗号、第二にヴォイニッチの中で使われているさらに複雑な「速記暗号」これら異なる二つの暗号体系を Bacon ベーコンのものだとした。

5.1.1 ラテン語の文章の暗号

ラテン語で書かれた錬金術マニュスクリプトは、Newbold によるとメッセージは良く選択され並べられ、錬金術もしくはそれに関係する主題を持った論文に見せかけられ、その中に隠されるということだ。錬金術の文章は常にミステリアスで、部外者には意味のないものであることが必要である。(多くの入会を望む者にとっても同様のことが期待される。)

従ってそのような作品の中には理想の「被覆」のための秘密のメッセージがあるのだ。Newbold のカバラの「ゲート」に基づく意見では、それぞれのラテン語で書かれた被覆のための文章中の文字の組は、書かれた平文の一文字を表している。この方法では 484 個もの文字の組み合わせが生まれる（22 個の文字から 2 つを選ぶ）ため、平文の中の 22 個の文字はどんな 22 個の「異字」または暗号組のどれかを示すことができる。Newbold は平文を表す膨大な組を選ぶ選択肢がある中で、制限を決めて単語の中の一つの組の最初の文字は、前の組の後ろと同じであるとした。例えばもし "unius" を暗号化したときには "or-ri-it-tu-ur" と表されるだろう。その後二重の文字は落とされ、"oritur" という短いラテン語の単語が得られる。（Newbold and Kent 1928b, p.53 以降。Manly 1931, p.34 以降にさらに詳しい説明がある。）複雑な、普通のラテン語のように見える被覆のための文章が差し込まれ、（少なくとも錬金術文章の中では）疑問に思われない。これらを加えるときには、たくさんの置換と、初めに再配置やアナグラムを 55 または 110 文字の文章の中に入れる段階がある。（方法 T.6）

5.1.2 速記暗号

Newbold (Newbold and Kent 1928, p. 106)によるとヴォイニッチの文章は全部で 6 つの段階を経て解読される。

1. 書き直し：速記記号を特定し、それを正しく別の文字に書き直す。
2. 音節分け：初めと最後の文字以外を二重取りし、得られた文字列は前の組の終わりと、続く組の最初が一致している。
3. 変換：どの組みでも 2 番目の文字は、「C. O. N. M. U. T. A. Q」の組み合わせ「変換」のどれか一つであり、この Newbold によって与えられた「変換アルファベット」で初めの文字を変換する。二番目の文字も同様「逆変換アルファベット」で変換される。どちらの文字も変換文字であり、指示されたアルファベットで変換される。
4. 翻訳：変換された文字の組は、それぞれ（表を参照しながら）アルファベットを割り当てられる。
5. 逆変換：アルファベットを「音価」へ戻す。（この過程は明らかにされない。）
6. 再構成：意味が通る文になるように文字を並べ替える。

第一段階の「速記」とは想像するに古代ギリシャ語の省略に基づくものであり、それがヴォイニッチの文字に適用され、虫眼鏡で調べられ、そのカーブや線を分割することになるのだろう。本の後ろには研究者が必要な全ての逆変換、変換、翻訳が行えるように多くの表が付いている。

Newbold と Kent は様々な種類の絵を手稿のいくつかのページから選び載せている。これらページの本文の解読も紹介しているが、絵とはほとんど関係がない。例えば占星の絵 (folio 72v) のページでは、2 人の古代ローマ人の話が読める。女性のいるページは出産や婦人科学が主題であり、少なくともいくつかの絵と一致する。（卵子、輸卵管、精子等。）これは f75 以降の裸の女性に対する近代の研究者の一部の意見と一致する。他の絵については彗星の出現記録 (f71v) や渦巻星雲の観測 (f68v3)、日食（金環食）(f67v2) と考えられる。

Newbold の主張は Voynich や他の多くから熱狂で迎えられ、たくさんの批評・論評が書

かれた。(Bird 1921, Garland 1921, McKeon 1928) Roger Bacon は注目の的となり、聴衆を楽しませる一方、彼は顕微鏡、望遠鏡の発明者とされ、多くの 20 世紀の科学的発見を先取りしていたとされた。カトリックの側は中世のスコラ哲学を擁護する一方、他方で先を争って謝罪、弁解をし、フランススコ会の中で彼の上司が 13 世紀の「先駆科学者」に加えた迫害を最小限に考え、無視した。(Reville 1921, Walsh 1921) 多くの有名な Bacon 研究者や中世哲学の研究者が Newbold の主張を無批判で受け入れ、彼らの Bacon 作品や思想と異なる時代を合わせる努力があった。(Carton 1929, Gilson 1928) 数名の騙されにくい学者は Newbold の解読理論を受け入れず、疑問を表明した。(Steele 1928; Thorndike 1921, 1929; Salomon 1934)

同時期もう一人の研究者、シカゴ大学英語学科の John M. Manly 教授は、手稿に興味を示し、(彼の言葉によればだが) 素人道楽として暇なときに数年間関わっていた。Manly は Newbold の友人であり、彼と手紙でやりとりをしていた。Newbold は彼の解読とその方法を Manly と何度も議論していた。1921 年に Manly は *Harpers Monthly Magazine* (1921b) と *American Review of Reviews* (1921a) 誌上に論文を発表し、その控えめな好意と中立の意見を、しかしいくつかの疑問と注意を表明した。1926 年に Newbold が死去した後出版された Kent 編集の遺作に対して Manly は *Speculum* (1931) 誌上で Newbold の理論を遠慮なく反証し退けた。

Manly は *Speculum* 誌の中でこのように彼の意見を述べている。「私が Bacon のものだとされる暗号システムの性質や操作を調べれば調べるほど、これが通信手段として用いられたことが不可能なことがはっきりしてくる。そしてそれは Bacon の著作などではなく、Newbold 教授が熱狂と純真なあまり潜在意識下で作らせたものである。私は手紙の中で Newbold 教授に私の出した結論とそれらの根拠を何度も示してきた。」(1931, p. 347) Manly は亡き友の仕事を攻撃する主張を望まず、代わりに多くの著名な研究者が確かに受け入れる理論を視野に入れ、誤解を解くことが必要と感じ、彼は説明を続けた。彼は「フランスの最も有名な哲学者の一人 Gilson 教授は、その方法に困惑しながらもその解読を受け入れた。Bacon の研究者で良く知られた Raoul Carton 教授は、2 つの長い論文の中でその方法と解読を熱狂的に受け入れた。アメリカの科学者、生物学者も同様であった。科学的真実のために、Newbold の暗号の主張は詳しく調査されなければならない。」と述べた。(p. 347) (Carton 1929, Gilson 1928 を見よ。)

Manly は初めからきっぱりと次のような主張を行っている。「私は Newbold の主張は全く根拠のないものであり、完全に退けられるべきものと考える。」(p. 347) 彼の説明では、Newbold が顕微鏡を使ってみた小さな線やカーブは、ギリシャ語の速記記号などではなく、単なるごわごわした羊皮紙の上のインクのひびであり、従って Newbold の第一段階は無効である。つづいて Manly は第六、最終段階の 55 もしくは 110 文字からなる文字のアナグラムについて反証する。彼はたった一つの短い文をアナグラム(文字の並び替え)を用いて、驚くべき数の意味の通る文を作り上げた。その中には韻を踏んだ詩すらある。例えば彼は Bacon 著作といわれる錬金術作品の中から、ある一文 "incipiunt quaedam caret quaestiones Bernardi cum suis responsionibus et est..." を選び、Newbold はこの文章から "De via et terra et coelis despicit mixta principia lume[n]" を得た。Newbold の「ラテン暗号システム」での元の文には同じような文章が、それ自体がアナグラムを始める以前に多くの可能性を

持っている。この文章は William F. Friedman が Manly と協力して Newbold の理論をテストするために使った文で、そこから異なる相当語句の組を選ぶことで、"Paris is lured with loving Vestals...."というアナグラムを得たり、異なる配置により多くの可能な文章が得られた。アナグラムについての問題、Newbold の理論の欠陥についての議論の全文は、Manly 1931, pp. 350 以降や Friedman 夫妻 1959 を見よ。

Manly が *Speculum* に載せた論文は、Newbold の理論を止めることができ、修道士 Bacon は再び不明瞭な学者に戻った。さらなる深い闇や 600 年も進んだ天体や婦人科学の知識、12 世紀の科学機器の発明者という架空の役割については、数名の過反応気味の現代学者へと託された。(特に強烈な批判と、Bacon の嘘を暴く態度は Thorndike 1916 や 1923-1958 により表明された。) また多くの注目を受け論争を起こし、そして完全に破綻した Newbold の仕事を無批判に受け入れた数多くの多くを知っているべき有名な研究者をきっちりと追跡調査しなくてはならない。このせいで多くの学者は手稿から足を洗い、またそれら問題を避けることとなった。もし学者としての Newbold の多大な名声と、中世哲学の知識が長きに渡る努力の結果、失望と愚かさを証明することとなったのなら、学者たちが自分の名声に傷を付けないため、そして心の平穩のためにこの問題に取り組む気が進まないことも理解できる。

5.2 Feely

Elizebeth Friedman (1962) は Feely と、彼の手稿の解読の主張を次のように紹介している。「1943 年、ロチェスターの弁護士 Joseph Martin Feely は『Roger Bacon's Cipher: The Right Key Found』という題の本を出版した。Feely は『Shakespeare's Maze, Deciphering Shakespeare』の著者であり、他には Friedman Collection の「暗号馬鹿」の項目を編集をした。」彼の著書の中の記述によれば、Newbold-Kent の著書の中に描かれた絵を通して手稿と出会い、彼の調査は実際的な方法で始まり、しかし解読は受け入れられることはなかった。彼は Roger Bacon のラテン語で書かれた *De Perspectiva* (光学についての著書) や *Communia Naturalium* (自然科学に関するもの) をしばしば頼りにした。

Feely はベーコンのラテン語の中で "E. I. T. A. N. U. S" を「リーダ」(彼はこの語を最高頻出の文字の意味で使っている。) であると記している。彼はヴォイニッチが単純置換であるとの仮定の下に、ヴォイニッチの文字頻度を平行分析した。(我々の仮説では P.1, E.1, T.1 である。) これら研究から彼はすぐに手稿の絵やそれに付属する文章に関連するだろう様々な単語を「推測し当てはめる」ことを試みた。彼は Bacon のラテン語が非常に省略されていることに気づき、苛立った。この調査から、彼は文章が 35% 減らされていると見積もった。彼はまたも苛立ちながら、中世と古典ラテン語の違いについても論じている。これらの困難は彼の統計的調査をかなりの点で苛立たせ、彼を安易な、そして手のからない、本文の中でありそうな単語を「推測し当てはめ」させることとなった。

Feely の推測の試みは実際、いくつかの成功を収めた。Newbold and Kent (1928. Plate V) に見ることができる f78r 中で、Feely は初めての解読をした。このページは裸の女性たちが液体の満ちたプールもしくは浴槽に入っているもので、Feely はこのページの上かどに

ある2つの雲状もしくは房状構造の物体(これらの詳細については図15を見よ。)は、「卵巣」であり、そこからページ中央へ続く水路は「卵巣」を下の方の「袋」へ運んでいる。Feelyによると、「袋」の中の「卵巣」は液体の中に立っている女性で示される。それぞれの構造のすぐ横にはヴォイニッチの文字で「ラベル(名前)」が書かれている。パイプの断面は、不思議な液体が流れ出て、プールへ流れ込んでいる。Feelyは初めての「道しるべ」(彼はそれが推測し当てはめた結果と呼びたがったから)をこれらラベルの調査と、それらしい様々なラテン語を当てはめることで得た。図25はこれら最初の調査で彼が得た結果を示している。

Feelyによって初めに与えられた「道しるべ」はヴォイニッチの記号を数個の文字へ置換するものであり、彼は次にこれを同じページの残りの文章を解くために使用した。彼には手稿全てのフォトコピーを手に入れる時間がなかったことを記しておく。彼は Newbold と kent (1928)の絵全てに対してこれを行った。彼が得た平文は、雑な、省略された偽ラテン語で、彼はこれを翻訳し f78r で婦人科的な英文を作り出した。彼は f68v3 (Newbold and Kent 1928. Plate XXII)にギリシャ語の単語を見つけ、それを解読したところ Memnon 像の不思議な記述を見つけたと主張した。(Feely 1943, p. 37) 他のページでは、Feelyは科学者が生きた細胞を顕微鏡下で見たことを記した個人的な日記を見つけたと主張した。その初期の研究者の非公式な書き留めは、宗教的権威の敵意の目から逃れるため暗号化され隠された。

彼がいかに Roger Bacon をこの科学日記の著者であるということに話を進めようとしているのを隠そうとしても、彼の解読には Bacon 著作を支持、確認する意図がみえる。図25は彼の研究の結果作り出したアルファベットである。(おそらくすき間を埋めるように文字を当てはめ推測し、何かラテン語のようなものができるまで試行錯誤したのである。)多くの研究者と同じように、彼もヴォイニッチの文字が単純な形が組み合わさり、多くの複雑な文字が作られたのだらうと考えた。Feely に取っては不幸であるが、他の研究者は誰一人として彼の解読を正しいものだとは認めなかった。Tiltman は一般的な意見を要約し、Feely の努力を以下のように退ける。「彼のてたらめな方法は、偽の省略形の中に、信じられない中世ラテン語を作り上げた。」(1968, p.6)

5.3 Strong

Yale 大学の Leonell C. Strong 教授はガン研究で尊敬される医学者であり、彼は O'Neill が手稿の年代を 1493 年以後とした論文(1944)を読んでから、ヴォイニッチ手稿に興味を持った。彼は、長きに渡るルネサンス作品への興味に関連して、この謎の書物の謎に取り組んだ。彼は研究のための本文のコピーを、5 年間以上手に入れることができなかった。最終的に彼は Feely と同様、出版された作品中の手稿の個々の絵に基づいて、研究を押し進めた。十分考えた上で、彼はこのミステリーの解読を短い論文の中で述べた。(1945)彼の解読は「多数アルファベットの等差数列による特別の二重システム」と呼ばれるものに基づいており、これはヴォイニッチ手稿が Trithemius や Porta や Seleni による暗号に通じていた人物が書いたことを示している。(Mckay nd, p. 49)

Strong の解読はそれが中世英語で書かれているという結論であった。彼は手稿の著者を、16 世紀チューダー王家の子供たちの家庭教師であった有名な Roger Ascham (or Askham) の兄弟である Anthony Ascham なる人物であると主張した。Anthony は医師であり、占星家であった。彼は暦や、天体、植物に関する論文を出版している。(Askham 1548a, 1548b, 1550, 1552, 1553) Mckaig (年代不明 p. 49) の記述によると、Strong が作りだした文章には「まったく正しい女性の病気や夫婦のベットのなかでの実践について議論したものであり、これを 16 世紀のキンゼー報告 (訳注: 男と女の性行動に関する研究報告) と呼んでも良いだろう。」が書かれていた。彼はその処方の中に植物避妊薬を見つけ、その効果を実験室でテストしてみた。その構成成分は松の樹皮から取ったヤニ、蜂蜜、ニシキギの油であり、Strong の主張では、ニシキギの油には彼の実験により精子の運動性を低下させる働きが見つかった。したがって避妊薬としての成分の有効性が証明された。(Strong and McCauley 1947, p. 900) しかし彼の暗号解読の仕事や、解読の方法の詳細は説明されないまま、疑わしさが残った。

Strong の解読文はいくつかの例が論文に載った(Strong 1945, Strong and McCauley 1947) ものもあるが、他の学者たちはそれが中世英語とは認められないと受け入れなかった。彼独自の結論を次のサンプルから到達したのかもしれない。「When skuge of tun'e-bag rip, seo uogon kum sli of se mosure-issue ped-stans skubent, stokked kimbo-elbow crawknot.」この驚くべき文字の羅列を、Strong はこのように訳した。「血管の中身が破れたとき (もしくは膜が破れたとき) 脚は曲げられ、同じく腕と肘は曲げられ頭の上で縛られ、エビのような状態で、子供は母から産まれる。」(Strong 1945, p. 608) 私には少なくとも、どんな人間がどの時代に書いたにせよ、または暗号かそうでないにせよ、そんなことはあり得ないと思う。そしてまた多くの研究者たちが書かれた内容が婦人科的なもの、性的な説明であると強迫観念的に取り憑かれていることも、私にとっては不思議である。ページの一部分に、小さく、全く冷静な婦人があちらこちらに描かれているだけでは、この強迫を正当化するに十分ではない。

私の知る限り、彼の理論を支持するものはこれ以上 Strong 博士からは聞けない。しかしヴォイニッチ手稿は現在 Strong の母校 Yale 大学で研究者は見ることができる。Elizebeth Friedman はこう語っている。「専門家は、彼が作り出したものは中世英語ではないと言った。彼の暗号の「方法」について彼はあまり口を開かないが、彼の言ったことは暗号の専門家にとってはナンセンスなことである。」(1962)

5.4 Brumbaugh

Robert S. Brumbaugh は Yale 大学の中世哲学の教授であり、1930 年代にヴォイニッチ手稿に興味を持ち始め、H. P. Kraus により手稿が Yale 大学に寄贈されると、それを見てみたいという衝動に駆られた。(Brumbaugh 1975, p. 348) 彼はまた O'Neill が絵の中にアメリカ大陸原産の植物を特定した(1944)ことにも印象を受けた。Brumbaugh は *Speculum* (1974)誌上にミステリーの解読を報告する論文を掲載し、「f75 の星図」で行ったと同じように薬草セクション中の植物の絵に付いているいくつかのラベル(名前)を読んだ。(1975,

p. 348) 彼はまたページの最後、「鍵」となる文字列の中に Roger Bacon の名前を見つけたとも言った。彼は手稿を、皇帝ルドルフ II 世に多額の金を出してもいいと思わせるように作られた贋作であると考えた。

Brumbaugh は完全な解読にはさらに多くの研究が必要だろうと言い、「占星術セクションやいくつかの植物、そして全文章をサンプルとした頻度の研究を行えば、私の解読が正しいことが分かるだろう。」と主張する。(1975, p. 348) 彼は f116v の文章と同じくらい f1r, 17r, 49v, 66r, 76r の余白、そして f57v の第二環に書かれた「鍵」となる文字列を多用した。Brumbaugh によればこれらのいくつかは故意に仕掛けられた罠であるが、しかし解読する際の助けにもなる。Brumbaugh は f116v の文章が、それ以上の説明はないのだが「普通の 13 世紀の暗号」により暗号化されていることに気づいた。(1975, p. 350) 彼はこれを f1r の左右の空欄に書かれた文字列から、2 つの通常のアルファベット"a"が"d"に対応している単純置換暗号であると気づいた。この暗号を使い、さらに綴り換えることにより、f116v の一部分"MICHI CON OLADA BA"から"RODGD BACON"を得た。(Newbold はこの同じ文章の始まりを"MICHI...DABAS MULTAS...PORTAS"と読んだことを記しておく。) この方法によって、ルドルフお抱えの学者が簡単に名前が「埋め込まれている」ことに気づき、結果として手稿が Roger Bacon の著作ということに騙され、興味を持つようになっていると主張した。

Brumbaugh は f66r の右下空欄に書かれた単語や文字が「手順」の組み合わせと考え、これら「手順」は「数を文字で置き換える」ことによってある記号と他の記号を同じものと見なせると主張する。彼はこの例をいくつか載せている。(1975, pp. 350-351) これら彼の説明は十分であるが、残りの「手順」についてはさらなる説明がないと私には謎が残る。これら「記号の同一視」を使うこと、そして植物のラベル(名前)を再生する(彼は"pepper"の中の"p"や"e"、"papaver"の中の"pa"の文字の繰り返しパターンを利用して「推測し当てはめる」)ことで、彼は 4 × 9 の対応表を作る。彼に言わせればこの表は「普通の錬金術師や、占星術師が使う暗号で良く知られたもの」に似ている。(1975, p. 351) そして彼は f116v の中に「quadrix(4) nonix(9)」という単語を見つけ、これが 4 × 9 構造を指していると考えた。図 26 は Brumbaugh が復元した暗号表である。

Brumbaugh の主張では、全てのヴォイニッチの記号が数字の 0-9 を表している。(または 1-9。もし 0 に役割があったとしても、彼の論文にははっきりと書かれてはいない。) この暗号化には初めに 4 × 9 の表を使い、文字を数字に置換し、アルファベットの文字を 1-9 に分解。次にそれらの特定を避けるために、それぞれのいくつかの異なる風変わりなデザインの数字の中から選んで置換するという 2 段階の操作がある。デザインは「近代、古代の数字、ギリシャ、ラテン語の文字、いくつかの筆記体の寄せ集め」から選ばれた。記しておくべきことは、この過程においては、ヴォイニッチの文字にも、元の文章にも多くの異文が含まれる。解読にはまず初めに、ヴォイニッチの文字の中で様々な形を持つ一つの数字を判読し、次にその下に対応する 2, 3 の平文を選択し書く。これが単語となるには、それらの選択肢の中で発音可能な文字列を選んだときである。

この方法を f116v のある部分に適用した例で手順を説明しよう。Brumbaugh はこのページの混ざり合った文章から、8 つのヴォイニッチの記号の並びを選び出した。このすぐ後には、彼が高地ドイツ語として読んだ「valsch ubren so nim ga nicht o」という句が続き、

それを「上のは偽物だから使うな。(the above is false so do not take it.)」と翻訳した。この8つのヴォイニッチの記号は、彼が作った対応により数字と見なされる。(彼はこれをほんの限られた形でしか、論文中に説明していない。)彼が得た数字は「02027339」であり、これに4×9の表を使って、2,3の同じ価を持つ平文が割り当てられ、彼は以下のような物を作り上げた。

0	2	0	2	7	3	3	9	
A	B	A	B	G	C	C	I	
J	K	J	K	P	L	L		
V	R	V	R	Y	W	W	-US	

彼は発音可能ないくつかの選択肢 (AKABYLLUS, ARAKYLLUS, AKARYCCUS, URUBYLLUS, ARABYCCUS, etc.)から「ARABYCCUS」を選び、これは暗号がアラビア数字が基になっていることを示していると考えた。彼の初めての論文(1974)の中では、彼は薬草セクションの植物ラベルから得られた他の方法の例をいくつか紹介している。多くの場合、発音できる選択肢は限られているので、この現象からは理論を信頼できるものとする。

Brumbaugh が解読によって作り上げた平文は、彼によれば「ラテン語を基にした人工言語であるが、それに強く縛られるものではない。綴りは音に基づく曖昧なものである。いくつかの句は単なる繰り返しが入り込まただけである。」さらにこの解読の問題点として、「上の暗号鍵は8ページ毎に僅かに変化する」(1975, p. 354) Brumbaugh はもっともらしく、その暗号は現代の軍用には向かないが、その曖昧さは当時習慣的に魔術、占星術、錬金術の文章に使われていたと主張する。

Tiltman (1975)は Brumbaugh の理論に関し批判的なコメントを出している。「手稿が贋作であるとの考えは、彼のオリジナルではない。私はすでにそれを 1951 年にあって欲しくない可能性として主張している。彼は全てのアルファベットの記号は様々な形をした数字であり、鍵は一つの数字をいくつかの文字へ置換する表で与えられる。例えばそれぞれの数字は 2, 3 の文字を表している。これは全て曖昧で、正しいとされるにはさらに多くの文章を確認し、証拠としなければならないが、彼はその証拠をほとんど示さないの、私は全く納得できないままである。記号が様々な形をした数字であると考えたのは Brumbaugh 一人ではない。すでに何度も提案されてきたものである。」

私が Brumbaugh の発表された 2 つの論文を詳しく調査した限りにおいては、彼の理論は、彼が提出した証拠を見た限りではもっともらしいものである。彼の主張は他のどの解読者よりも手稿から観察できる現象や、歴史的に知られていることに基づいている。私は困難な試み 2 つとして、できる限り多くの様々な数字の形を彼の論文中や、短くそしてしばしばなされる彼の暗号の記述から推測できる限り復元してみた。私がこのようにして得た対応表の断片から、私はいくつかの植物のラベルや、疎らに書かれた短い文章を解読しようと試みたが、その結果は様々であった。その多くは意味のないものであり、いくつかはラテン語、もしくは偽ラテン語のようにも思えた。(もちろん文章の繰り返しから期待されるように) その多くはとても良く似たものである。この過程はある人を騙すのにはもっともらしいが、満足させるには十分ではない。図 26 は私の推測により Brumbaugh の様

々な 9×4 の行列表の再現を試みたものであり、それと彼の植物ラベルの解読の例である。

Brumbaugh の新しい論文は *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, University of London (1976) に掲載されている。この論文の中で Brumbaugh は自分の最近の研究が、解読が正しいことをさらに証明したと述べている。